

於て行ひ、或は男女婚姻の約成立するや、婚禮前、婿は夜中女子の家に入出入するを常とする部落あり。然れども、共に婚禮の期日には、婿は美服、良馬に騎して女子の家に赴き、女子の家には、別に新なる氈幕を設けて之を迎へ、親近相會し、喇嘛僧を請じて儀式を行ひ祝宴を開く。斯くて式宴既に結了するも、婿を始め同行の親近者、尙は數日間女子の家に滞留し、夫婦相親むに及んで、漸く夫の家に歸る。新婦新郎家に歸るに當てや、更に喇嘛僧を延いて讀經せしめ、後ち天地日月を拜するを、一般の儀式とす。

滿、漢人

哈薩克の婚姻も、略之と同じきに因り、敢て記載せず。其他、滿、漢人間に行はるゝ婚姻に就き、少しく掲ぐべき要あり。蓋し滿漢人は、最も婚儀を貴重し、而も必らず慣例定式、外見を装ふ。彼の自由結婚の如きは、夢想だにもせざる所にして、婚姻の定約も、全く父母の意に適するを度とし、毫も本人の意思を問はざるなり。又兩家同一の家格を撰び、婚儀畢りて後、三四日を経れば、新婦は一たび生家に歸り、宿泊數日にして、夫の家に歸り、爾來全然夫家に屬す。若し不幸にして其夫死すれば、死殉、疾病あれば自己の生肉を裂きて藥鑿に煮るの惡風あるも、政府は却て之を旌表し